世界文学全集 48

伊藤整編

世界近代詩十人集

河出書房

世界文学全集 48　世界近代詩十人集

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和38年2月15日　初版発行
昭和44年8月1日　19版発行
定価　430円

訳　　者　伊藤　整
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　草刈龍平
装　　幀　原　弘

印　刷・中央精版印刷株式会社
製　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

世界近代詩十人集

ハイネ編……三
ホイットマン編……三七
ボードレール編……七九
ヴェルレーヌ編……一四一
ランボー編……一七一
イエーツ編……二二七

リルケ編……二七一
ヴァレリー編……三四一
T・S・エリオット編……四〇九
マヤコーフスキイ編……四五一
訳注……四九〇
解説……（伊藤　整）…四九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

世界近代詩十人集

ハイネ編

井上正蔵
片山敏彦
高橋健二
生田春月
尾上柴舟
森鷗外・他
上田敏
番匠谷英一
訳

ハイネ編目次

〈歌の本〉
むかしゆめみた……5
夜の夢に……5
（朝おきると）……5
（わたしの悩みの）……6
（ばらと糸すぎと）……6
山の声……7
或る歌姫に……8
わが母・B・ハイネに……8
たのしい春……9
おのが涙……10
君が瞳を見るときは……10
僕の心の……10
ちひさい瞳は……11
（わたしは夢を見て泣いた）……11
星がひとつ……11
だれでも自殺したものは……12
おのが心……12
あまをとめ……13
月がのぼり……13
はるかなる……14
花のをとめ……14
輝きそむる朝の日に……14
たそがれの薄明……15
夜の船室にて……15
問い……16
〈新詩集〉
序詩……16
（私は一つの花を）……17
（五月が来た）……17
（静かに私の心を）……18
（あゝ、私は涙に）……18
（これまでかうした）……18
（むかし年寄りの）……19
（このごろ私は見た）……19
（またも私は引き離された）……19
（冷たい心に）……20
セラフィイヌ……20
（君が私を愛してゐる）……21
（この厳の上に）……21
回廊……21
（おれが甘美な接吻に）……22
（二人の恋の謝肉祭）……22
（むかし私はかう信じてゐた）……23
（新しく琴をあはせ）……23
（僕と一緒に逃げて）……24
（春の夜に霜がおりた）……24
（彼女の墓のうへに）……24
ある女……25
春の祭……25
凶運の星……26
一八三九年……26
驕慢……27
あこがれ……28
アダム一世……28
傾向……29
世は倒様……29
夜の思い……30
〈ロマンツェーロ〉
モットウ……31
世の成り行……32
回廊……32
天使たちに……33
決死の前衛……34
砂時計の中……34

〈歌の本〉

むかしゆめみた

むかしゆめみた　灼きつく恋を
きれいな髪に天人花(ミルテ)に木犀草(レセダ)
甘いくちびる　にがい言ひわけ
かなしい歌のかなしいしらべ

いつしか夢は色あせ消えて
いとしいひとの姿も失せた
熱いこころを捧げて書いた
あまい調べのうただけ残る

すてられた歌よ　お前も行けよ
そして探せよ　むかしの夢を
逢へたらよろしく伝へておくれ
はかない影におくるはかなさ

（井上正蔵訳）

夜の夢に

夜の夢に、自分の姿を見た。
祝祭のうたげの席に行くやうな黒の礼服、
絹のチョッキ、袖にカフス。
わが前に恋しい人が立つてゐた、しとやかに。

私は礼(レ)していつた「あなたが花嫁なのか？
さらば、芽出度い祝詞をおくる！」
しかしわがのどは殆んどつまり
声はかすれ伸びて、恭々しく冷たくなつた。

そのとき恋しい人の眼から
にはかに悲しみの涙がながれて、
涙の大浪に優しい姿も殆んど溶け消えた。

いとしい眼よ、たふとい両(ふた)つの愛の星よ、
おんみらは醒めてしばしば私を欺き、
夢にまで瞞すけれど、それでも未だ私は信じたいのだ。

（片山敏彦訳）

朝おきると、わたしはたずねる、
「いとしい人はきょうはくるかしら」と。
夕方わたしは突っ伏して、嘆く、

「あの人はきょうもこなかった」と。
夜わたしは悲しい心を抱いて、
眠れずに寝どこにおきている。
昼間はなかばまどろんでもいるように、
夢みながら歩いている。

（高橋健二訳）

わたしの悩みの美しいゆりかごよ、
わたしの憩いの美しい墓標よ、
美しい町よ、もうお別れだ――
さようなら！　とわたしはお前に呼びかける。
さようなら、いとしい恋人の踏む
神聖な敷居よ、
さようなら、いとしい人を初めて見た
神聖な場所よ。
そなたに会うことがなかったら、
美しい心の女王よ！
わたしは今こんなにみじめになることは
決してなかったろうに。
そなたの心に触れようとはついぞ思わなかった。
愛してとは、わたしはついぞ願わなかった。
たゞ、そなたの息吹のかようところで、
静かに暮らしたいと思ったばかり。
それだのに、そなたはわたしをこゝから追いたて、
むごいことばを口にする。
狂気に心はえぐられ、
わたしの心は痛み、傷つく。
力なくだるい手足を
旅の杖にすがって引きずって行く、
疲れた頭を
遠い国の冷たい墓に横たえるまで。

（高橋健二訳）

ばらと糸すぎと金箔で
この本を棺のように
愛らしく優しく飾りたい、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

そしてわたしの歌をその中に入れたい。
あゝ、この恋ごころも棺に入れることができたら！
恋の墓には安らいの小さい草花がはえる。
花は咲いたかと思うと、摘みとられる――
だが、花は、わたし自身が墓に入る時、初めて咲く。

さてこゝにある歌は、かつては
エトナ火山から流れ出た溶岩の流れのように、
激しく心の奥底からたぎり出て、
きらめく火ばなを周囲にまき散らした歌だ！

今はその歌も無言で死人のように横たわり、
冷たく靄のように色あせて動かない。
だが、いつか愛の心がその上に漂うと、
昔の情熱がこの歌をよみがえらす。

わたしの胸をしきりに予感が騒がせる、
愛の心がいつかこの歌の上に溶けそうな予感が。
いつかはこの本はそなたの手にはいる、
遙かな国の甘い恋人よ。

すると、歌の魔力がとけて
色あせた文字がそなたを見つめ、
哀願するように、そなたの美しい目をのぞきこみ、
悲しい心と恋の息吹をこめてさゝやく。

（高橋健二訳）

山の声

山峡を　騎士ひとり　進みゆく
哀しげに　打沈む　跑の音
「今俺の　行先は　恋人の　胸なのか
それとも　ゆく手は　暗い墓」
山の声が答へる
「暗い墓」

その騎士は　引続き　ただ進む
そしてまた　深々と　吐息する
「もう俺は　このまま　墓へ行くのか
それも宜し　墓には　憩ひがある」
山の声がまた云ふ
「墓には　憩ひがある」

愁ひげの　その騎士の　頬からは
一滴の　涙が　落ちる

「墓だけが　この俺の　憩ひの場か
それならば　恐らくは　墓がよい」
声は空ろに　谺する
「墓がよい」

（井上正蔵訳）

或る歌姫に
（うたふ譚詩を聴いて）

はじめて見た歌姫の
ふしぎな魅力をまた思ひ出す
その声はやさしくひびき
心に甘くしのび入り
思はず頬に涙がこぼれた
もう自分のことなど分らなかつた

夢がゆらゆら　あらはれた
自分はまだ子供だつた
母の静かな部屋の中で
ランプの灯の下にじつと坐つて
すばらしいお伽話を読んでゐた
いつしか夜となり風が出てきた
お伽話が生きてきた

騎士たちが墓穴から出てくる
いまロンスヴォで戦闘が行はれ
騎士ローランが馬を進める
後にはあまたの勇士が従ふ
悲しいかな　あの卑劣なガヌロンも

ローランはガヌロンの騙し討ちにあひ
血の海に身をひたし息も絶え絶え
その角笛のひびきも遠く
シャルル大帝の耳には届かぬ
するともう騎士は色蒼ざめた
そのとき夢も消え去つた

嵐のやうな喚声だつた
それで夢から自分が呼びさまされた
ちやうど伝説の曲は終つたところ
人々は手を拍ちはやし
「ブラヴォ」を連呼しつづけた
歌姫は深く身を屈めた

（井上正蔵訳）

わが母・B・ハイネに

1

わたしはいつも頭をぐっと高くあげています。
わたしの心も少しかたくなで強情です。
王さまに顔をのぞかれたって、
わたしは目を伏せないでしょう。

だが、いとしいおかあさん、打ち明けて申します。
わたしの高慢な心がたとえどんなに偉そうにふくれても、
あなたのなんとも言えず甘いしんみりした側に行くと、
わたしはよくつゝましい気おくれにとらえられます。

人しれずわたしを抑えつけてしまうのは、
あなたの精神でしょうか。何物もはゞからず貫き、
天の光まできらめき昇るあなたの高い精神でしょうか。
あなたの心を、わたしをあんなに愛してくれた
美しい心を、悲しませる振るまいをいろ〳〵犯した
記憶が、わたしを悩ますせいでしょうか。

2

途方もない考え違いから、私はあなたを見すてました。
わたしは世界のはてまで行こうと思いました。
愛情こめて抱きしめるような
愛人が見つかるかどうか、見ようと思いました。
到るところの小路でわたしは愛を求め、
戸ごとに両手をさしのばしました。
そして僅かな愛の喜捨を乞いました。——
けれど、笑いながら冷たい憎みをくれるだけでした。

それでも私は絶えず愛を求めてさまよいました。
絶えず愛を求めて、しかしついに愛を見出さず、
うちに引き返して来ました、病んで悲しく。

ところが家ではあなたが迎えてくれました。
そして、あゝ、あなたの目に漂っていたもの、
それこそ、永くあこがれていた甘い愛でした。

（高橋健二訳）

たのしい春

たのしい春がやつて来て
いろんな花がひらくとき
そのときわたしの胸からも
愛のおもひが萌え出した。

たのしい春がやつて来て
いろんな小鳥がうたふとき
こひしい人の手をとつて
燃ゆるおもひをうちあけた。

おのが涙

おのが涙のしたゝらば
麗しき花咲きぬべし
おのがなげきの響きなば
鶯の音となりぬべし

われを思はゞをとめ子よ
花をば君にまゐらせむ
きみが窓辺にうるはしき
鶯の音もひゞくべし

（生田春月訳）

君が瞳を見るときは

君が瞳（ひとみ）を見るときは
たちまち消ゆるわが憂ひ。

君にくちづけするときは
たちまち晴るるわが思ひ。

君がみむねに寄るときは
天の悦びわれに湧き、
君を慕ふと告ぐるとき、
涙はげしく流れ落ちたり。

（尾上柴舟訳）

僕の心の

僕の心のこの傷を
可愛い花が知つたなら
一緒に泣いてこの痛み
或ひは癒してくれるだろ

僕の切ない悲しみを
小夜啼鳥が知つたなら
たのしく歌ひ　苦しみを
或ひは解いてくれるだろ

僕の歎きをあの星が
黄金の星が知つたなら

（片山敏彦訳）

高い空から降りてきて
きっと慰めてくれるだろ
だけど知ってるものはない
知ってゐるのは唯ひとり
僕の心に爪を立て
八つ裂きにしたあの女だけ

ちひさい瞳は

ちひさい瞳は青菫
かはゆい頬は紅薔薇
あどけない手は白小百合
その花のいろ変らねど
その心根はひからびた

（井上正蔵訳）

わたしは夢を見て泣いた、
お前が墓に葬られてる夢を見て。
目をさますと、
涙がまだ頬から流れていた。
わたしは夢を見て泣いた、
お前に捨てられた夢を見て。
目をさましてからも、
わたしはまだ長いこと激しく泣いていた。
わたしは夢を見て泣いた、
お前が変わらずやさしくしてくれる夢を見て。
目をさましてからも、いまだに
涙の流れは滝のようだ。

（井上正蔵訳）

星がひとつ

星がひとつ
きらめく空から落ちる
ほら　落ちるのが見える
あれこそは恋の星

花や葉が　ばらばら
林檎の樹から落ちる
いたづらものの風が来て

（高橋健二訳）

戯れたり弄んだり

池のなかを白鳥が
歌をうたつて漕ぎ廻る
声はおとろへ低くなり
水の墓場に沈んでゆく

この蕭やかさ　この薄暗さ
花や葉は飛び去り
星は砕け散り
白鳥の歌はとだえた

（井上正蔵訳）

だれでも自殺したものは

だれでも自殺したものは
四辻のわきに埋められる
そこにはあをい花が咲く
世に捨てられたひとの花
四辻に立つてかなしんだ
夜は音もなく冷えてゐた
月のひかりに揺れるのは
世に捨てられたひとの花

（井上正蔵訳）

おのが心

おのが心のいかなれば
かくは悲しくなりぬらむ
ただそのかみの物語り
湧きこそいづれおのが胸

風冷やかに暮れそめて
ゆふべ静けしライン川
沈みゆく日の影うけて
かゞやきわたる山の峰

みめ美しきたをやめの
姿ぞみゆる山のうへ
黄金のかざりひらめかし
とくや黄金のみだれ髪

黄金の小櫛手にとりて
ときつゝ歌ふ声すなり
おどろくばかり力ある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb